國學院大學学術情報リポジトリ

大国隆正の神観念についての一試論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上西, 亘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001716

大国隆正の神観念についての一試論

上西　亘

1　はじめに

本稿の目的は、大国隆正の思想上重要と筆者が考えている、「なか」の思想が言語学研究のみならず、造化三神を中心とした神観念が天照大御神を重視した思想構造の根幹に根ざすものであったことを明らかにするものである。

隆正の思想について、田原嗣郎氏は「大国の思想が独立してとりあげるほどの価値をもたないと一般に思量されているからだと思われる。」といみじくも述べている。確かに、「とりあげる価値をもたない」のではと一般的に思われがちであるため、名声に比して、隆正自身の思想構造に関わる論考が少ないのも事実である。だが、今一度隆正の一連の著作中、神観念や言語解釈のテクストを再考することによって、隆正の思想から見えてくるものがあると筆者は考えている。

本稿執筆の動機の背景には、近世・近代思想史上における隆正の思想と一連の著作については、数多くの先行研究が成果をあげている。近代日本思想の一つの出発点として隆正の思想を問う論考や、幕末維新期の代表的な思想家としての大國隆正の動向について言及するものなどが充実してはいるが、隆正のライフワークであった言語学を視野に入れつつ隆正の思想を考察するものが殊の外少ないことに端を発している。

だが、尠いながらも、岡田實氏、阪本健一氏、平田厚史氏、内山宗昭氏、松浦光修氏らの一連の論考は隆正の思想と言語学との関連性について言及されている。

岡田氏は長崎遊学を境として隆正の言語学研究を出発点とみなした嚆矢といえよう。特に、岡田氏は隆正が五十音図を根底にした説を提唱していることを明確に見出している。[1] 阪本氏も同様に、隆正の言語学が隆正の学問の根底となっていることを明確に示している。[2] 平田氏は言語学的思想について明確に言及はしていないが「なか」の思想や天之御中主神に対する隆正の研究姿勢について詳細に考察を試みている。[3] 内山氏は、教学面から隆正の思想を論じ、隆正の述べるところの「本教」の理念を教育思想史の側面から言及している。松浦氏は未翻刻の新資料を明らかにすることにより、初期の隆正の学問姿勢が五十音図に依拠したものというよりも、むしろ和歌に対する研究が初期学問形成に影響を与えたことを示唆した。[4] また、松浦氏は隆正の天皇観を時代ごとに区分し、佐幕派であった隆正が、時代の画期において朝廷と幕府の関係をどのように位置付けていたかについても論じている。[5]

言語学については言及されていないが、嘉永から慶応期の国内外の周辺状況が隆正の思想展開にどのような影響を齎したのか、理論的かつ詳細に論じた武田秀章氏の論考[6]も言語学と比較検討する上で欠かすことができない。

その他、広く国学者の言語学研究において、国学者が「儒学者などとの思想闘争の拠点が言語学をもとにした宇宙観や世界観の構築であった」ことに言及する相原耕作氏の論考も大変興味深い。[7]

かかる先行研究を踏まえ本稿では、隆正の言語学研究の特質を再確認し、天皇総帝論に代表される隆正の天皇論と言語研究との連関性を考察する。そして、隆正の思想と言語学との連関性[8]をいかに捉えるかを目的とする。

2　隆正の「なか」の思想と天之御中主神の再検討

上記に掲げた隆正の思想を語る上で注目すべき先行研究の他に、押さえなければならない論考として、上田賢治氏の「大国隆正の思想体系とその基本的性格」[9]がある。隆正の思想構造と学究態度について特に詳細に検討、整理されている論考である。

上田氏は隆正を維新期の神道思想家の中でも特に顕著な特異性をもった人物であると規定し、その思想的特色を論じている。まず上田氏は、隆正の天皇論について着目し、「神武創業の古へを理想としたことは単に、歴史の始原に帰つて、国土統治の理念を再確認するといつた風の意図にのみ発したのではない。寧ろ彼の著作を通じて読み取り得るところでは、建武の中興を理想とすることへの反対自づと其処に導いたのだと解釈する方がより妥当であることを知り得たのである。」と述べる。すなわち、隆正の天皇論の出発点となるものは、建武中興の際の天皇の位置づけに疑問を抱き、「国依さしの神勅」によって天皇たらしめた時代が神武即位の時代であったことを指摘しているのである。

続いて上田氏はその天皇位の「嫡流」を隆正が重要視していた事への特異性を述べる。隆正の著作である『学運論』の一文を引き、「神武天皇やまとにうつりたまひし後も、地を住民にわかちあたへてみつぎのさたもなく、みこころひろくおはしましけり。ただ宝祚をだにまもりたまへは、皇祖神霊への御孝行はたつものなり。」という隆正の結論が一種の天皇象徴性を言及するものであると指摘しているのである。

以上、上田氏の論の概略を敢えて紹介するに終始したが、隆正の天皇観を主として天皇の重要性と神聖性を歴史的

背景に基づき端的に表現したものとして、肯定できる論考とみなせよう。上田氏の論点は的を射たものであり、殊更に言及する必要が無いかのように見受けられる。

改めて、上田氏が指摘する隆正の天皇論を整理すると、

① 隆正は建武中興の治世ではなく、国依さしの神勅に立ち返ることを理想とし、「宝祚無窮」の神勅を特に重視している。

② かつ我が国を知ろし食す人物は、国依さしの神勅を受けた嫡流でなければならない。

となろう。

しかし上田氏の論考を熟読するに一つの疑問が生ずる。それは、隆正は天皇位の重要性と至尊性の根拠を「国依さしの神勅」まで遡る必要があると考えたのであろうか。

これには、隆正がどのように天皇という存在を受容し、考証・研究し、数々の著作において結論付けたかを、順を追って考える必要があろうと思量する。そのためには、『古伝通解』など、隆正が神観念に対して言及する著作と再度解釈する必要があろう。

だが、隆正の思想構造の検証を難しくしているものは、やはり隆正の著したテクスト解釈の難解さであろう。隆正の古典解釈は、しばしば独自に提唱した言語に対する姿勢と密接不可分に混在し、読者に難解さを感じさせる。しかし、隆正の言語論と神観念を別々に論じることは、生涯に亙って五十音図とかな文字一音に意味を見出そうとした隆正の学問姿勢を考えるに「片手落ち」となろう。前稿では、隆正が文字に対してどのような意味を付加していったかを雑駁ながら論じた[10]。その際隆正の著作に頻出する語句である「なか」の思想について言及したが、この「なか」の思想は、天之御中主神に対する神観念が内在化しており、同時にムスビの神や天照大御神、天皇(隆正の述べる所の「国

之御中主神」）の位置づけと、至尊性を見出す契機となった概念であると筆者は考えている。後述するが、天照大御神を中心とした神道説を提唱したとされるのが、隆正における現在の神観念の定説なのであるが、その思想も「なか」の概念抜きにしては語れないのである。

結果として定説とされる「天照大御神を最も重視する」という隆正の神観念について異論はないが、なぜ天照大御神を中心とした神観を獲得するに至ったのかについては今少し検討する余地が残されており、「なか」の思想と隆正独自の天之御中主神観が創出したものであることを踏まえて置く必要があろう。[11]

筆者は、隆正の天皇観や神観念、とくに造化三神や天照大御神に関する概念は、数々の著作を著した際に獲得した、隆正が独自に編み出した古典解釈の方法と森羅万象あらゆる事象との整合性の上に立脚し、獲得した思想であると考えている。[12] また、「なか」という概念も隆正が用いる一円相を用いた世界観の説明も五十音の理解がなければ解くことの出来ないテクニカルタームであると考える。

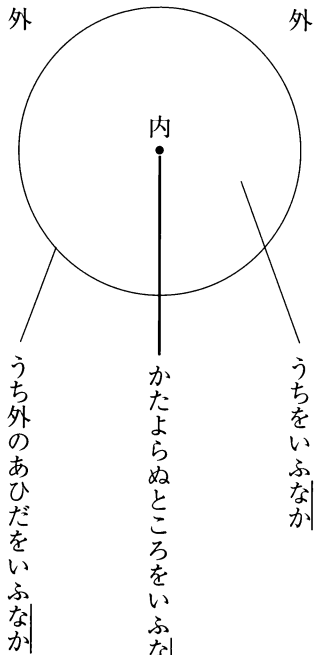
まずは、隆正の「なか」の思想と円を用いた説明について改めて概略を紹介したい。

3　「なか」の思想と造化三神

まず、隆正の「なか」の思想と独自の天之御中主神の解釈を確認するために隆正の著作『本教神理説』の該当箇所を確認する。

○天之御中主神　なかといふことばに三つのこころあり、かたよらぬなか、うちをいふなか、間をいふなかこれなり。此の三つのなかうちあひて円相をなすものになん。円相より円相をいだし、円々相依りて天地はなれるも

のになん。まづこれを大中小とわかり、それをまた合せて、天地の真をしるべし。天之御中主神別天神とあれば、緯星天よりときはじむべし。初発之時いまだ中円小円の差別なかりしなり。大円の中点に小円のおこりしを天地のはじめとす。その小円はじめは浮脂のごときものにてありけるが成熟して、いまの日球となれるものなり。タカマノハラニとあるは、その小円をいへるものなり。



（野村傳四郎編『大国隆正全集第二巻』[13]・七頁）

隆正によれば、

① 中心（中点）を示す「なか」

② 外側との境界を示す円の外辺を示す「なか」

③　円の内面「なか」の三つの「なか」

がそれぞれ存在し、各々の「なか」のはたらきによって円相が浮かび上がる。そうして出来た様々な円が構成され、大小様々な円によって世界が構築されていくという、隆正の思想の淵源が見て取れる。

加えて、この三つの「なか」の概念を、隆正は『古傳通解』でも使用し、「天之御中主」の注釈において詳細に論じている。とりわけ、三つの「なか」のうち中点をしめす「かたよらぬなか」に、さらに細かな意味があることを論じて、「なか」という言葉の概念をさらに肉付けさせていくのである。

かたよらぬなかにまた四つのこころあり。うごかぬなか、なかにつくなかなかにつかぬなか、つらぬくなか、これなり。まづこれらの差別をときて、なかといふことのこころをくはしくしり、中は道のもとなることをさとるべきなり

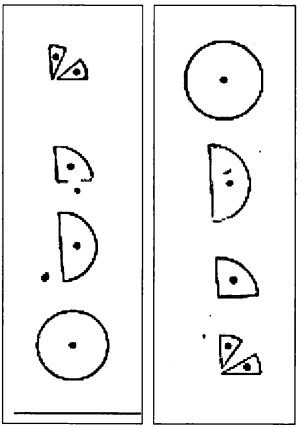
（『全集六』・六十二頁）

この「なか」の概念が天之御中主神とどのように関わるのか。『斥儒仏』において隆正は、「いま隆正が神代古事と五十音の言理とによりてさとり得たる、神道の大要をときてきかすべし。神道はもと天之御中主神の神の御名におひたまげるなかという一言よりおこりて、天地の間にあまねくいたらぬかたのあらぬものなり。これに正中・偏中の和価値あり。[14]」と述べているように、天之御中主神と「なか」の概念との関わりは萬物の生成に密接に関わる問題なのである。

隆正は『神理一貫書』において、天之御中主神の神格を次のように述べている。

天之御中主神

萬物に中點なきものはあらず。萬物いづれもその中點へ八面をひきつけて形質をたもつものなり。内ウツロナルモノアリ、盈ルモノアリ。ユガメルモノアリ。ウツロナルモノハ、ソノ中點眼ニミエズ。ユガメルモノモ亦、ユガメルママニ中點ハアルナリ。



破ればわるにしたがひ、砕けばくだくまにまに中點はそのわれ、そのくだけに別れうつる。

そのわれ、そのくだけをよせ合すれば、よせ合するにまかせて、その中點はもとへかへるなり。

これを見てさとるべし。高天原は天地の核にて、萬物はみなこれよりおひいでたるものなれば、皆その根本の形を具へて中點あるなり。高天原におきては、この神を天之御中主神といふべく、萬物にありては、各それの御中主神といふべきなり。米には米之御中主神あり。塵には塵之御中主神あるべし。一粒一塵ごとに中點ありて、そこに御中主の神霊おはしませば、或はくだけて萬となり、億となり、或は集りて三となり、二となり、一となりて、おはしまさぬところとてはあらざるなり。

米ヲ砕キテ粉トスレバ、一粒々々ニ、御中主神分レタマフナリ。ソレヲ集メテ團子ノ中點ニウツリテ一ツニ集リタマフナリ。米ヲ俵ニツクレバ、一俵ノ御中主アリ。百石積メバ、百石ノ御中主トナリテ、大小手ニシタガヒ、

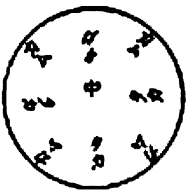
集散時ニヨリテ、定マリケレドモ、オハシマサヌカタハアラヌナリ。」

（『全集五』・二一七～二一八頁）

隆正によれば、天之御中主神は万物全てに宿り、森羅万象すべての中点をなすものであると論じている。であるならば、その他の神と天之御中主神はどのような関連性を有しているのであろうか。続けて隆正は「うごかぬなか」が生まれる根拠として高御産巣日神と神産巣日神についての考察を展開する。

高御産巣日神

たかはたけ・たくとはたらきて、その中點よりおこりて、かぎるところまでのびゆくをいふことばなり。日のたくる、夜のたくる、背のたくるなど、みなその中央よりそのかぎりまでのびゆくをいふことばならずや。このはたらきを體言にしてたけといひ、そのたけをたかとうつしつづけていふは、酒を酒瓶、船を船板などといふごとく、四を一にうつす合語の格なり。むすびは中點をとりて外邊へむすびたるをいふ。さればこの神霊は、中点よりおこりて外邊までのびゆく、根元の霊にておはします。



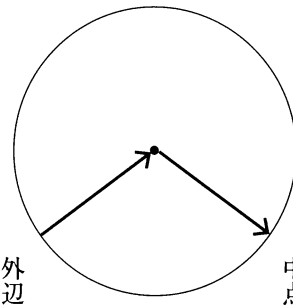
神産巣日神

かむは四方八面より中点をおすをいふ。噛も下歯にて上歯をおすなり。鼻をかむも左右より中をおすをいふ。被るは上より下をおしつゝむなり。さればこのかみは外邊より中点を壓したまふ神なり。むすびは外邊を中点へむすびたまふによりていふなり。

この三神によりて、無心の圓形活路を得るなり。

わが御中主神ばかりにはあらず。たか・かむの二神もまた、一米一塵のすゑまでも、つきそひおはしますなり。〈『全集五』・二一八頁～二一九頁〉

造化三神と「なか」の思想との連関性を隆正の一円図に当てはめると次のとおりとなろう。



中点より外周に広がり形を象る高御産巣日神

万物の中心としての天之御中主神

外辺より中点を圧す高御産巣日神

「たか・かむの二神もまた、一米一塵のすゑまでも、つきそひおはしますなり」と隆正が言及しているように、万物を象る全ての現象には、天之御中主神とムスヒの二神、即ち造化三神の力が働いて初めて成立することを示唆している。(15)

これらの説を踏まえつつ、隆正は再び天之御中主神について言及する。

これによりたちかへり、天之御中主神のことをくはしくとくべきなり。

なかということばに、三つのわかちあり。かたよらぬをいふなかあり。うちをいふなかあり。間をいふなかあり。

箱ノナカナドイフハ、ウチヲイフナリ。

中垣ハ間ニアル垣ヲイフナリ。以後、中・内・間ト文字ヲ書分テ、ソノ意ヲシラシメントス。

円形は、萬物、萬事、萬物をうみ出すところにて円形は三つのなかあひてなれるものなり。天之御中主神は、かたよらぬなかにあたり、高御産巣日神は、内をいふなかにあたり、神産巣日神は間をいふなかにあたりたまへり。これによりて考ふれば、高御産巣日神は天之御中主神の荒御魂にて、神産巣日神は、和魂にておはしましけり。

〈『全集五』・二一九頁〉

これらの論は、一見「汎神論」とも見受けられる天之御中主神と高御産巣日神と神産巣日神の神格であるが、隆正にとってみれば、ムスビの神も天之御中主神の荒御魂・和御魂と考えていることからすれば、[16] 隆正の造化三神の神格をまず理解しなければ、『古伝通解』や『天地人神名考』における神の概念も理解できないこととなる。「なか」の概念がどのように隆正の思想によって形成されているかは、隆正の思想の全ての出発点となることが理解できよう。

また、天照大御神について隆正は、これら「なか」の思想から出発してなぜ天照大御神が至尊の存在であるかを『候録』において、「日は緯星天の中點にあるものなり。その中極に天之御中主神おはします。天之御中主神の分霊のすぐれたるを　天照大神といふ。日球をはじめ緯星天をとりすべてつかさどりたまふ神霊なり。[17]」と指摘している。や

はり、隆正にとって、天照大御神を説明する上でも天之御中主神の「なか」の思想が重要であって、分霊として特に優れた「天照大御神」が中点となり、その歴史性をつらぬく「なか」として皇祖皇霊が存在し、その皇統を中線に結び、現に国之御中主として世界を治める「天皇」が存在する原点となることから、「天照大御神」「天皇」の至尊性が担保されるという考えに至るのである。

これら隆正の神観念を念頭に置いて考察を試みる一環として、隆正の代表的な思想である「天皇総帝論」について若干の考察を試みたい。

4 「天皇総帝論」と隆正の神観念

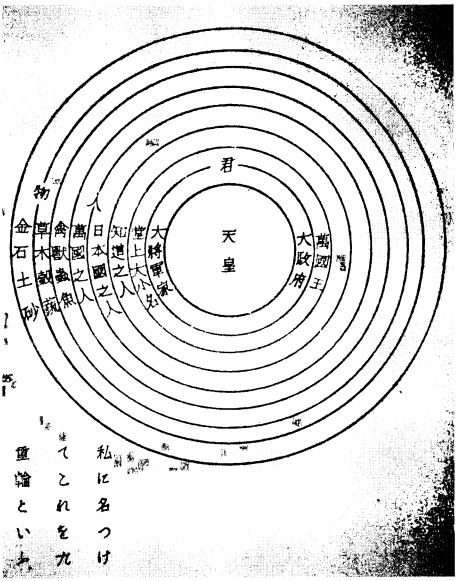
大国隆正の研究のなかで、着目されるものの一つとして「天皇総帝論」が挙げられよう。「天皇総帝論」は、隆正の政治思想の特質を論じるものとして欠かすことの出来ないテクニカルタームである。これを、政治論の枠を離れ、隆正の論じた一連の著作を通してどのような位置づけをなすべきか検討する余地があると筆者は考えている。例を挙げるならば、天皇の皇祖たる天照大御神との関連性を重視して、津和野派の思想といわれる、「天照大御神を重視した神道観」を形成する論証として「天皇総帝論」と位置づけたものと、隆正が自らの学問で重要と位置づけた「なか」の思想との連関性についてなどである。隆正の天皇論を考察する上で、これらの事を述べるのは論拠の絶対条件ではないため、言及している先行研究は殊の外尠い。今回は「天皇総帝論」についての紹介と、著作中に散見される「天皇総帝論」に関わる論考と、隆正の神観念について考察を加えてみたい。

天皇を万国の総帝として中心に配置し、全世界を統括する至尊の存在と見る隆正の思想は、多くの先行研究にて指摘と考察がなされている。その中で松浦光修氏は宣長以来の政治論を、

(A)万国は天照大御神の恵みに浴している。よって、万国の統治権は天照大御神の子孫である天皇にある。

(B)その天照大御神が誕生されたのは日本である。よって、日本は万国の中で最も優れた国である。

と、大きく2点に要点を絞り、『玉くしげ』本文中の「本朝は、天照大御神の御本国にして、万国元本大宗たる御国なれば、万国共に、この御国を尊み戴き臣服して、四海のうちみな、此まことの道に依り遵はではかなはぬことわりなるに」という箇所を引用して「万国は日本に臣従しなければならない、ということは、つまり、日本は「君」の国であり、諸外国は「臣」の国である」という宣長の主張を纏めている。[18]



これを受けて松浦氏は、隆正の天皇論を嘉永六年以前と以後、安政二年の主張の三期に分けて論じ、宣長の説を祖述することに終始していた隆正の政治論が次第に「帝爵の国」や「総王」・「総帝」の概念を獲得した経緯を纏めている。[19]

松浦氏によると安政二年以前には天皇総帝論は完成し、将軍を外国の王の上に位置づけていた自説を、諸外国の王と将軍を同等に位置づけ、これを日本独自の「大帝爵の国体」として、天皇と将軍による二重統治の体制を論理的に整合させたとしている。安政二年頃成立の『古伝通解』を見ると、依然として将軍家を外国の諸王の上位に位置させていることが

見て取れる。

〈『全集六』・一六三頁〉

此の図によれば隆正は、この世に存在する万物を一円相内で９つの円に分け外側から金石土砂・草木穀藷・禽獣蟲魚の３つを「物」と位置づけ次に万国の人・日本国之人・知道之人と位置づけこれを「人」と規定する。その際、同格にあるものとして堂上大小名は万国王を、大将軍家は大政府をそれぞれあてがっている。

また、一連の隆正の言説からも見て取れるように、隆正が天皇論を述べる上で重視したことは、将軍家と天皇の二重統治を正当付けたかったことではなく、あくまでも「神代の中線」を伝える日本と（隆正の述べるところの）「本教」の伝わる「日本」こそ、世界の「なか」たるべき国であり、世界の「中点」であるところの日本を統べる「國之御中主」、すなわち天皇が世界を統治するのが、世界の「まことの道」に通じるものである、と隆正が論じていると解釈するほうがより正確に隆正の天皇観を見いだせると考えるのが至当であろう。

5　國學院大學所蔵本慶応版『音図神解』に見られる隆正の神観念

これまで、隆正の「なか」の思想の中核を支える天之御中主神を中心とする造化三神の働きと、隆正の世界観を表す「なか」の概念がどのように現実世界と連関性を以って説かれてきたかを概観してきた。ここでは、隆正の最晩期の著作である國學院大學所蔵本『音図神解』を紹介しつつ、隆正の五十音図と神の概念について少々触れていきたい。

『音図神解』は『古事記』の注釈を試みた『古伝通解』と並び、隆正の主著と位置づけられている。『音図神解』は、隆正の五十音図に基づく言語学研究の成果である。

同著は安政二年頃に成立したものが一般的に知られているが、隆正は安政二年以降も「音図神解」と名を冠した著

作を数冊上梓している。[20]

本資料は隆正最晩年の慶應二(一八六六)年から明治四(一八七二)にかけて記された國學院大學図書館蔵『音図神解』[21]の自筆稿本である。

本文構成としては、安政二年版のような完成された書籍の形態を取らず、さながら隆正の言語学に関する日記形式の「学問ノート」のような形式である。また、各冊毎に年月日が錯綜しているところから一気呵成に描き上げたものを再構成して冊子形態に纏めたものと考えられる。

本資料でも隆正の著作の特徴である一円相など図版を駆使して説明を試みる執筆形態も見て取れる。また、隆正が没する数ヶ月前まで執筆が続けられていることからも隆正の五十音図と言語学に対する並々ならぬ学問的興味が見て取れよう。ここから、隆正の思想が見られる基礎的資料を提出し、神観念を考察する一助とすることを本項の目的とする。

ア、『音図神解』文中に見る言語学的主張と世界観の模索

第一巻目である『本義』冒頭の部分に、「神道のまこと」と題して天皇について言及するも、言語学との関わりにおいては未だ模索の段階にあることが、後述する同様の文章を参照することによって理解出来る。和歌を神道と結びつけ論じた国学者がいたように、隆正の最終目標は神道と五十音の正しい理解が学問の真髄であることを確信していたことが見て取れよう。

①　慶應二年丙寅三月

十九日

神道のまこと

音ハ万國同しくしてことは、万國同しからす道は万國同しくして教は万國同しからすことはの同しからぬ徴は古事記序にも重訳といふことあるをもてしるへし道の同しきあかしは忠孝仁義をわろしとするくにはあらぬなりしかありてわか日の本はとつくに、すくれてとふときことあるなりみちのすくれてあることは神代より天皇の大みすちさらにかはりたまわすことのすくれてあることはあいうえおをことはの下いつかわすてらりるれろをことはの上におかす上下の分別よくきは中かにわかりてあらルるかみよのことはをもてさとるへしこれをもてわかくにはくにのもとにわかすめらきはよろつのくにのもとつ大きみにおはしましてよろつの國の國王ともはそなみや川とくにとまをしくみつきとたてまつるへきものにてありける

（『音図神解一　本義』三丁表～四丁表）

「神道のまこと」に見られる思想は嘉永・安政期に見られる著作の思想とほぼ同一であるが、積極的に言語学との関連性を見出そうとしているところに晩年の隆正の意気込みが見て取れる。

安政期は「あ」と「わ」の言葉にのみ言語の意味を付与しようと試みたが、慶応期の著作においては五十音全てにおいて意味付けをして、持論である五十音と森羅万象との関わりを証明しようと試みている所に着目したい。

次は、神道のまことの対となっていると思われる五十音図のまことについてみてみよう。

○五十音図のまこと

あいうえお

身より入るひとつになるのこりのこりてうつろわす
かきくけこ
　よりかはるつらぬく
さしすせそ
　とりのけと、くしたかふしたかハす
たちつてと
　あひ、くあひよるとほるとほらす
わゐうゑを
　とどむとゞまるうつるへきものうつらす
はひふへほ
　底よりいつわかつわかるわかれてわかれす
まみむめも
　並に向ふおしてひく
なにぬねの
　したかふしたかはしむ
らりるれろ
　のこさすのこらすうつろふ
やいゆえよ

かさぬかさなるうつろへからめものうつる
神代にはしめをにごることバなしつらなりてにごることありにこるときハすへてしひたもつこころそふなり
野之口政大国中隆正しるす

（同　四丁表～五丁表）

前述したように安政版『音図神解』との決定的な違いは、「あ」と「わ」との違いを説明すること自体を、隆正が自身の言語学を理解する上で必須事項であると認識していたため上巻については「あ」と「わ」の2語の意義付けに終始していたが、五十音図の「縦糸」とよべるあ行～わ行についての意味を付加しようとしている所に着目したい。一つ一つの意味は容易に判然し難いが、先述の造化三神と「なか」の概念の中核となる中心としての天之御中主神、中点から外辺を象る高御産巣日神、外辺から中点を圧する神産巣日神の概念が各行の説明にも影響していることが窺えるのは明らかである。

同様に、各行に隆正が試みに神格を付与している箇所があるので、そちらを見てみることとしたい。

イ、造化三神と五十音についての言及

②　慶應二年丙寅

六月 朔日

五十音原義

あ　へたてありあはんとす

ひとつものふたつにわかれてへたてりゆくへたてらせあはすあふへきすちなりいまわかれてありこの聲にあふへきすちあり

なにぬねの　天之御中主神

はひふへほ　タカヒムスヒノカミ

あいうえお　カムムスヒノカミ

あいうえお

外よりいるひとつよりはなすはるかのこりのこりてもとをたかへす

い　うつすてうつとる

う　つきつきによるむすはるあらたまる

え　およふ中よりおよふ

お　すゑにつくもとにつく

四十五音もまた底にこのいてのこころあり

（同　八丁表～八丁裏）

此処で注目したいのが、な行に天之御中主神を、は行に高御産巣日神を、あ行に神産巣日神をそれぞれ配しているところであろう。安政版『音図神解』で言及される「あ」と「わ」の働きを考えると、「あ」は隔てを作る高御産巣日神を配し、「わ」には「間をいうなか」である神産巣日神を配するところであるが、な行は「なか」の思想の根底を示す天之御中主神を配しており、は行については安政版『音図神解』下巻に述べるところの「なげき」のこえと「ゑ

み」のこえ[22]、即ち「人が初めて獲得した表現」に高御産巣日神を充てており、「言葉のはじめの声、五十音の始まりの言葉」であるあ行に神産巣日神をそれぞれ充てている所は興味深い。

ウ、天皇総帝の言語学説上の言及点

慶應二年丙寅八月

十六日

五十音原義

あ

へたてありよらんとす

ひとつものふたつにわかれわかれたてへたてりゆくへたたいてよらんとすいまわかれてありこのゆゑにへたてありもとひとつなりこのゆゑによらんとす

い

うつすてうつとる

あしきをすてよきをとるこゝろくらきものよきをすてあしきをとる

う

つきつきによりあらたまる

一ときにはあらたまりかたしつきつきによりてつひにあらたまる

え

およふ中よりおよふ
　中にまことのなかありかりのなかありかりの中よりおよふハわろしまことの中よりおよふをよしとす
お
すゑにつくもとにつく
　かりのなかはすゑなりまことのなかは本なりわか天皇はまことの中にておはします五十音圖は人のことはのまことの中なり、これにまことの神道はこもりてあり、わかくににつたえたまへるあめつちいてきはしめ給ふることはもとのまことのふることなり

（同　十丁表～十一丁表）

③　丁卯五月

十一日

天地のことはわか神代古統と五十音圖とにこもりてもるることなし神代古統ハ造化のをはり人事のはしめむ五十音圖ハ正対互対奇対経緯表裏善悪のもと出て互にをあはせり
日月は正対なり偶なりこれに地球をましふれは奇対となる日地反対なりて地月もた反せり日は外陽内陰なり地は外陰内陽に日は経星にして地は緯星なり日中に善世界ありこたまの原といふ地下に悪世界ありよそのくにといふ人間は表なり鬼神の世界をうらとすこれらの理五十音圖にこもりてとけはとかるるものになん
上の巻にもいへることく大日本國は万國の總本國にてわか天皇は世界の總帝にておはしませとも日本國の人これをしらすしらぬにより呉國の所説を本としわか古説をそれより下におきてとくに神道家國學家歌學家といはるる人もまたときにいたらさりけれはにやこれをしらす日本國のもとのことしてとくなりひらくへきときそきくそこにはしめて東

満大人真淵大人宣長大人篤胤大人四説を一部てわり古道家をおこしたまへりその四大人の功おのおの得たるところありてひくしからねともわかくにの忠臣なり又おのおの誤きところありていまたつくさせすこれにより隆正これを大成せんとしるこころさしありこころさしはのりみてかたらすされども古傳通解音圖神解をあらはしてそのあらましをいはんとす又このふみをみてその大躰をしるへきなり

（同　十六丁表～十六丁裏）

「なか」の概念に用いられる、造化三神の位置づけにおいても言えるのであるが、各々正対する事象を当てはめて、世界の真理であることを裏付けようとする処に、隆正の世界観を形成する特徴が見られる。丁卯五月（慶応3年）の段階においても、天皇を世界の総帝としており、論ずるところの典拠に安政期に成立した『古伝通解』や『音図神解』をあげているところからも、天皇を中心とした世界観の形成は変わりがない。隆正は早期から考究していた言語が指し示す世界観・宇宙観と、嘉永・安政期に獲得した政治論・外交論等他の言説との整合性があることを最後まで示そうと試みていた事が見て取れよう。[23]

6　むすびにかえて

隆正独自の天之御中主神観をまず理解しなければ、単に天照大御神重視の神観念ということになる。隆正の数々の著作から見えるものは、「なか」の概念であり、「汎神論」的な天之御中主神観から展開される「もと」「すゑ」の思想など、種々に類別される「なか」の概念が根底にある。全ての事象、理は「なか」という隆正独自の点と線によって導き出される「ミナカヌシ」であることを隆正は主張したいのではなかろうか。つまりは、隆正にとっては、全てのモノが「ミナカヌシ」であり、天之御中主神の特に優れた「分霊」が天照大御神であり、その「中線」の先に、世界

の中心に位置する国之「ミナカヌシ」である皇祖皇霊があり、現在の「国之御中主」である天皇をとりわけ尊崇した。これが隆正の神観念、天皇観なのである。

「天之御中主神重視」か「天照大御神重視」か峻別を試みると、かえって隆正の神観念を煩雑なものとしてしまうであろう。

また、言葉をとくに神聖視している面も安政期の著作から一貫していることが、慶応版『音図神解』からも見て取れる。前述の「なか」の概念に基づき、五十音の行に造化三神をあてはめようと試みた姿勢は大変興味深い。

一つの著作において通読すると難解なテクストであっても、追って思想的特徴を捉えることが出来れば、体系化し理解することは十分に可能であると筆者は思量する。

今後は他の国学者の言語学、とりわけ言語解釈に神道や神の概念を盛りこもうと試みる著作を調査し隆正の言語学との相違点を見出し、幕末維新期の思想史における言語哲学的研究にさらなる考究を加える事を目標とする。

ほか、隆正の「本教」を受容した国学者(福羽美静など)や、見解が相違している平田派国学者は隆正の神観念をどのように捉えていたのか。今回の結果を踏まえて、比較対象とすれば、幕末維新期の霊魂観や天体説の受容など、新たな視点が生まれると予想される。この点は次回の課題としたい。

註

(1)例えば岡田實氏の『大國隆正』を見ても長崎遊学が隆正に与えた影響に触れられている。

而して隆正は、長崎に遊學すること五閲月に及び、其の期間必ずしも長いとは云へないが、長崎で得るところは遍

だ多かつためである。専ら吉尾權之助に就いて西洋の理學を學んだのであるが、隆正が後年發表せる論著に、泰西の窮理的要素を巧に取り入れて、古典の解釋に前人未到の新天地を開拓し得たのも、この長崎遊學の賜であると云はねばならぬ。其の他佛教関係の文献も渉獵する所があつたと云はれてゐるが、青年隆正が異国情緒の極めて濃厚な長崎の街、蘭人や清國人の匂ひ漢へる中に、好奇の眼を輝やかし乍ら、貧るやうに新しい知識の吸収に日もこれ足らぬ様であったことと想像される。一日隆正は、清國人某に就いて書法に関する話を試みた。清国人某の隆正に教へていふやう、貴國には貴國の書法があり、清國には清國の書法がある。貴下が如何に刻苦勉励して清國の書法を學んでも、その技能たるや到底我れに及ぶことは困難であらう。それ彼我各〻の長所とする所を異にするが故であると。隆正はこの一言によつて深く悟るところがあつたといふ。既にして隆正は長崎を去って、郷國津和野に入り、次いで江戸に歸ったのであるが、爾來、皇朝諸名家の筆蹟を學んで遂に一家の書風を立てるやうになったのである。この頃、隆正自詠の歌に、

たてそむるこゝろさしたにたゆますは　たつのあきとの玉もとるへし

と。心中深く立志の念禁じ難く、やがてはその大なる目的も達成せずんば止まざるの気塊を示してゐる。長崎遊學は隆正の學問的生活に、一つの轉磯を齎らしめたやうである。江戸に戻ってからといふもの、従來の文人墨客との交際は断然止められた。而して漸く思を我が神代の故事に潜め、我が神代の故事は、獨皇國のみに止まらない、廣く地球萬國に亙る神理であって、我が皇統の天地と共に窮り無きは、偶然ではない旨を覺り、また五十音圖に係る諸書を讀破し、五十音圖の絶妙大理を闡發するに至つた。かの大著『古傳通解』の稿を起すに至つたのも、此の頃であると云はれてゐる。（一六頁～一七頁参照）

(2)「同十二年（寛政十二年：筆者注）庚申（一八〇〇）九歳。父秀馨によりいろは歌を更に享和二年（一八〇二）五十音

図の手ほどきを受けたが、彼は大いにその音韻の神妙不測なるを知り、我が国音、僅かに五十の子母音で、其の活用変化の妙理に至つては、宇宙の間、万有の神理を包含する本源であると感悟したといはれる。ともかくこの音韻についての学問が生涯に亘り、所謂大国学の根柢となつてゐることは争はれない。」

『神道文化叢書2　大国隆正』(神道文化会　昭和四十年)を参照。

(3)平田厚志「大国隆正の神道思想」(『日本の社会と宗教ー千葉乗隆博士還暦記念論集』同朋舎出版　昭和五十六年)参照。

(4)松浦氏が儒学期から國學的和歌へと転換したと主張する劃期の具体的文章は以下の通りである。

それは、当時の隆正が、漢土の文化の盲目的な崇拝者であった、ということと深い関係があろう。つまり、当時の隆正は、清国人から直接、いわば「本場」の書道を習ぼうとして、長崎に出向いたのではあるまいか。長崎での書道の師は、金均光という人物であった。かつて、書道の修行のため「工に命じて板を削らしめ、之に書して学習」(『奉公事跡』)することまでしていた隆正であるから、均光に就学してからの隆正は、かなり熱心に修行をつづけたものと思われる。しかし、なかなか思うようには上達せず、焦燥した隆正は、しばしば均光のもとへ、質問に出向いたらしい。そして、そのあげく、均光は隆正に、こんなアドバイスをした。「書は、一小技といえども、おのずからその国風ありて、他国人のその特色にならはんと欲するも、到底、その風致にはおよぶべきものならず。されば君は、君が本国に特有なる学問、技芸を研磨して、その名をなすの優れるにしかじ」(『木園福羽美静小伝』)。ここにおいて、隆正は、何か悟るところがあったようである。それは、いくら他国の文化を慕い、その模倣に勤めても、その本国人でない以上、ある種の限界がある、そんなことで苦労するよりも、自国の学芸を窮めることこそが、ひいては国際社会にも通用する文化的成果を生むことにつながるのだ、というようなものであったろう。「自

国の学芸」といった場合、隆正には、すぐに思いあたるものがあったと思われる。副次的ではあったが、幼少のころから学んでいた和歌が、それである。

文化十一年、二十三歳のころ、隆正が編纂に参加した『柿本社奉納和歌集』というものが、現在残っている。そのころ隆正は、まだ漢土の文化の崇拝者であったが、それでも和歌に関しては、すでにかなりの素養をもっていたことが知られる。そういう素養があったところへ、均光からの、そのようなアドバイスである。これを契機として、隆正の学問思想は、その中心を儒学から和歌の学問へ、いわば歌学的国学へと移していった、と筆者は見ているが、これは隆正の学問思想における、きわめて重要な転換点であったと思われる。

これ以外にも、このときの長崎遊学は、後年の隆正の学問思想に、多大の影響を与えた。なんと言っても、当時の長崎は、海禁体制下にある日本の公的な窓である。若き日の隆正が、ここで国際情勢や国際文化に、肌で触れる機会を得たことの意義は少なくない。とくに、このとき西洋の学問思想に触れたということが、のちに重要となってくる。」

（下線部は筆者）

『大國隆正全集　第八巻』所収「大國隆正の思想と生涯」三一〇～三一一頁参照。

（5）『大国隆正の研究』大明堂　平成十三年参照。

（6）「ペリー来航と大國隆正」（『神道学』百四十　平成元年）参照。

（7）『日本思想史講座3―近世』所収「国学・言語・秩序」参照相原氏は「言語は儒学者とのイデオロギー闘争の場であった。」とし、特に国学者が言語学を研究することについては「秩序構造と密接な関わりを持っていた。日本語をめぐる国学者の秩序構造は、特に世界観・宇宙観とも連動している。」と論じている。筆者の着目する五十音

図研究については、「国学者が儒学者に対して仕掛けたイデオロギー闘争の拠点であると同時に、国学者内部の闘争が繰り広げられた場なのである」と論じている。

(8)岡田氏と松浦氏は同様に隆正の長崎遊学を学問の画期としており、両者の論ずるところに大差は無いように思われるが、問題は隆正が幼少時から並々ならぬ興味を持っていた「五十音図」についての位置付けである。松浦氏は隆正が『柿本社奉納和歌集』編纂に参加したという点から学問動向をそのまま歌学に直結してしまっているが、岡田氏は隆正の生涯のテーマとする「五十音図」の研究に言及している。

この相違は恐らく『津和野藩士奉公事跡』をどのように捉えるかによって生まれた物であると考える。松浦氏が指摘するように『津和野藩士奉公事跡』には伝記として不備が見られるが、「此より後、文人の交際を止め、専ら神代の古事・「五十音図」に係る諸書を攻め、遂に、「神代の古事は、独、皇国のみに止まらず。広く地球万国に亘る神理にして、我皇統の窮(きわま)り無きは、偶然にあらざること」を覚知し、又、「五十音図」の絶妙大理を開発し、『古伝通解』、及『倭屋一家言』(「得経談」、「服観談」、「為寝談」、「融通談」、「変革談」、「談余」、「言霊発」、「倭屋記」)の稿を起す。」という箇所に関しては触れられていない。

松浦氏の研究の画期的な所は、隆正の初期の著作を翻刻し、その結果から考察を加えていることにある。新たに翻刻した著作の大半が「歌学」に関する物である為、「歌学的国学」期とこの時期の隆正を位置付けているのであるが、「歌学」か「五十音」かいずれにせよ初期の隆正の思想形成については今一度慎重に検討すべきではなかろうか。

(9)『神道宗教』昭和二十九年七月号、昭和三十年四月号を参照。

(10)拙稿「大國隆正の言語学研究序説」(『神道宗教』二一七号　平成二十二年)を参照

(11)「なか」の思想と天之御中主神との関わりについては、前掲平田論文を参照。

(12)『本教神理説』においても隆正は「わがくにの古事にこゝろをつくして、これをさとり、はじめて世にあらはす造化の秘説なれば、耳あたらしく今のよには、とり用いる人少なからん。されども天地の眞なれば、つひにみしる　人の、しらでかなはぬ大事になんある。この外に、この日本國にてつかふことばの、もとをあかせることばあり。」〈『大国隆正全集第五巻』有光社　昭和十四年・二頁〉と述べ、言語が世界観をも表す玄妙なる意味を持つものであると力説している。

(13)有光社　昭和十四年 以下特に断りのない場合は『大国隆正全集』を『全集』と明記する。

(14)『全集四』・一九〇頁参照。

(15)天之御中主神を一種の汎神論的に見る隆正の造化三神に対する言説は早くから、河野省三博士が『国学の研究』(大岡山書店 昭和七年)において、特に鈴木重胤の説を中心として論じている。ムスヒの神の神格についても、『神道要語集 宗教篇』において委曲を尽くして論じている。また阪本健一氏も前掲の『大国隆正』において、隆正の造化三神の位置づけについて、「五、天地のはじめ　造化三神」として、隆正の天之御中主神観を、「天之御中主神がその真中におはしますによつて、傾くことがなく、円形をなして、つひに今日の日輪に化したのである。理の方面からいへば、儒家にては未発之中(允執二其中一)であり、仏家にては(天台の中道実相)といひ、道家にては道(守中)と観じ、中を以て教の本となしてゐる、と斯様に理解したのである。」と述べ、造化の三神として「御中主神のつぎに、高御産巣日神、神産巣日神がお生まれになった。これは中点より長(たけ)る気と、中点をさして外辺より嚙む気とを司どりたまふ神である。」と、しかと論じている。

(16) 隆正の規定する「四魂」に対する位置づけついては前掲内山論文、『神道要語集』(神道文化会　平成二十五年)所収の「荒魂」、「幸魂・奇魂」、「和魂」、「術魂」四六〇頁～四七一頁(何れの項目も河野省三稿)等を参照のこと

(17)『全集三　三三〇頁』参照。
(18)註5に同じ。
(19)註5に同じ。
(20)安政二年頃成立『音図神解』の他に、『音図神解総説』として学習院大学図書館に所蔵されているもの、そして今回紹介する國學院大學図書館蔵『音図神解』一〇冊本が現在確認されている。安政二年頃成立『音図神解』については、拙稿「大国隆正著『音図神解』の翻刻と紹介」(『明治聖徳記念学会紀要　復刻四十六号』)を参照のこと。なお、阪本健一氏は『大国隆正』巻末において大国隆正関係文献をまとめており、[未刊著作]として、『音図神解』も記載されている。本来であれば、安政版『音図神解』ならば上下巻合わせて「二巻」と記載するところを、「一二巻」と記載している。これは、安政版『音図神解』二巻と慶応版『音図神解』十巻を合わせた一二巻と見るのが適当で、既に慶応版『音図神解』を看取した上で、『大国隆正』を執筆したと考えられよう。
(21)國學院大學図書館蔵(貴三〇六～三一五)、現在本学図書館デジタルライブラリーで閲覧可能である。http://k-aiser.kokugakuin.ac.jp/digital/menus/index07.html
(22)これは、安政版『音図神解　下巻』に詳細に言及されている。隆正の考える人間の創出した原初の声は、はー(あ)、ひー(い)ふー(う)へー(え)ほー(お)と発する「なげきのこゑ」であり、文字を逆にすると「ゑみ」の声に変じる。隆正にとっては行とあ行は対となる言葉でもある。参考に安政版『音図神解』の該当箇所を紹介する。

あいうえお、はひふへほ、くミあへば、ゑミのこゑとなり
はなれて長くひけバなげきの聲となること人
のせさするにあらずして、おのづからしかいふもの也

あ　い　う　え　お
は　ひ　ふ　へ　ほ
あは丶　いひ丶　うふ丶　えへ丶　おほ丶
あァ　いィ　うゥ　えェ　おォ
はァ　ひィ　ふゥ　へェ　ほォ
いづれもなけくこゑなり（前掲「大国隆正著『音図神解』の翻刻と紹介」を参照。

(23)この半年後に大政奉還が行われるのであるが、『古伝通解』にて触れた大将軍家の位置づけに関してはここでは触れられていない。隆正は自らが考える天皇中心の世界観を現実問題と整合性を付けるために、大将軍家の項を創出したのか、それとも妥当な政治体制として捉えていたのかを読み解いていかなければならないが、此の点については今後の課題としたい。